天主閣だより

マキキ聖城キリスト教会

「祈り」に思う

藤浪　義孝牧師

世界中には数えきれないほどの数の宗教があります。そのうちキリスト教、イスラム教、ヒンズー教、仏教、ユダヤ教、バハーイ教は九五パーセントを占めています。どの宗教も「祈り」を特別な意味のあるものとして見ています。ある宗教は、理想とする生き方を実現できるように自分の言動や態度を変えるためのものと理解しています。自分自身の幸せの原因を作るためのもの、自らの現実を作り出すためのものと受け止めている宗教もあります。また、祈りは精神的影響を与えるものとして、病を治す精神療法であると信じる宗教もあれば、想像力を活発にさせ、願っていることを目に見えるようにするためのものであるとか、信仰を表すためのものであると信じている宗教もあります。どの宗教にも共通していることは、目に見えない霊的な力が存在するとの考えを持っていることです。

有神論（神が存在する）を主張する人の多くが、祈りは単に神に何かをしてくれるように伝えることだと考えています。また、大勢の人が、神を巨大な宇宙の自動販売機のように受け止め、車、家、金銭、健康、人間関係、その他どんな概念でも心に浮かぶ願いを実現してくれると想像しています。

マキキ聖城キリスト教会は、聖書が原典において何ら誤りない神のことばであり究極の権威があることを信じているキリスト教会です。そして聖書に取り扱われている祈りというものをとても大切にしています。しかし、祈りの意味をわからないままで今日まで信仰生活をしている人も少なくありません。今月から数回に分けて祈りについてご一緒に思いを巡らせたいと思います。

遠い昔、セム族の学識豊富な長老や学者たちが、セム語「スローター」という特有の言葉を生み出しました。私たちはそれを日本語で「祈り」英語で「Prayer」と訳しています。古代アラム語から生まれたこの古代用語「祈り」は、たいへん明確な意味を持っています。この古代アラム語の語源の意味とその関連性を明らかにすることで、その意図をより深く理解することができます。

ある言語から別の言語へ翻訳する際、ある言葉や思想の持つ本当の意味やその言葉に含まれているニュアンスを保持することは非常に困難です。日本語に直訳しても意味がわからない英語の表現があります。例えばLemon（レモン）です。学生時代に、自分の車を指して「レモンだ。レモンだ。」と不平を鳴らしている友人を理解できませんでした。二〇〇三年のソフィア・コッポラ監督脚本映画「ロスト・イン・トランスレーション」をご覧になられるとよく理解できるでしょう。国際結婚している人なら異文化間のコミュニケーションが如何に難しいものであるか体験するでしょう。私たちは、翻訳の段階で何かを失います。私たちの日本文化と西洋文化のように異なる文化に関わる場合よりも、古代中東文化に関わる場合、その作業はさらに困難なものとなります。古代中近東のセム語（アラム語、ヘブライ語）から現代アジアや西欧の言語に聖書を翻訳する際に、昔も今も問題になっています。

アラム語は古代近東におけるセム語系の共通語でした。この言語は、紀元前二千年紀の終わり頃、中近東の各地に浸透し、アラム人、アッシリア人、カルデア人、ヘブライ人、シリア人の言語となりました。二十一世紀の今日もこの言語は、現在でも世界の多くの地域で話されています。アラム語とヘブライ語は姉妹語です。ヘブライ語の語源の多くがアラム語の語源です。ナザレのイエスの母国語はアラム語でした。イエスは、アラム語で弟子たちや人々と語り、教え、福音のメッセージを伝えました。イエスが山上の説教で教えられたあの有名な「主の祈り」はアラム語で教えられたのです。

「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』」（マタイの福音書六章六節―九節上）

（次号に続く）

今月の証

「三度目の誕生日の真実」

マキキ教会音楽宣教師　高瀬　瑞恵

ハレルヤ　主のみ名を賛美いたします。

私には三回誕生日があります。もちろん、この世に生を受けた日、そしてボーンアゲインした日。ここまでは想像ができることと思いますが、新たに破壊された骨髄から白血球が突然沸いて出てきた日、すなわち死から生につながった日が出来たのです。

私は二〇一八年三月に体調不良で受診した病院で白血病の疑いありと診断され、そのまま救急車で医師付き添いの上、専門医のいらっしゃる病院に移送されました。急性前骨髄球性白血病と診断を受け直ちに抗がん剤治療に入らなくてはいけないほど重篤でその日から病との闘いが始まりました。

抗がん剤治療を四クール行われると説明を受けましたが、入院翌日には急変し、自発呼吸もできなくなりHCUに移されました。感謝なことに、一週間で無菌室に戻ることができましたが、髪は抜け、激しい嘔吐、下痢、高熱、口の中は白くただれ、血圧低下により気を失った事もありました。

聖書を読むどころか祈る事も出来ず、ただ神様助けて下さい。ともにいてくださいと心の中で願うことが精一杯でした。力となるはずのみ言葉も出てこないのです。唯一、「主我を愛す主は強ければ我弱くとも恐れはあらじ、」の賛美が私の支えになっていたと思います。厳しい治療もなんとか四クール目までたどり着くことができましたが、その四クール目、医師にとっても想定外の事が起こりました。いつまで待っても白血球が出てこないのです。点滴や輸血が行われ、骨髄移植の準備などもされました。

この時点でもし快復しても、難病指定の再生不良貧血になります。と言い渡されましたが、検査により抗がん剤で骨髄本体が破壊され遺伝子を作り出していない事がわかったのです。すなわち死を意味しており、その事は直接医師から告げられましたが、

「恐れるな、わたしがあなたを贖ったからだ、私はあなたの名を呼んだ　あなたは私のもの」
（イザヤ書四三章一節）

神様によりすべての恐怖から守られ、私自身は壊れたのなら治るまで待ったら良いのだと導かれ平安でした。主治医は私が理解できていないと判断し、主人に、奥さんの余命は二週間であり延命のため三〇人分の鮮血献血協力者を集める事、肺が真っ白なため間もなく呼吸不全に陥り人工呼吸器を装着し、会話できなくなると告げられ、この事を主人から私に伝えるようにと迫られていたようです。主人は私に告げることもできず、心は嵐のごとく騒いでいたようですが日曜日の礼拝後に協力をお願いしたところ、三日間も拘束されるにも関わらず多くの方が応答してくださったそうです。その皆さんが来てくださる事になっていた九月三日、月曜日の早朝採血の結果をご覧になった主治医が病室に飛び込んでいらっしゃり、「ありえないことが起きました。壊れた骨髄からポッ！と沸いてきました。献血の人を止めてください」とおっしゃったのです。世界中の方々の熱い祈りと愛の行いにより、主は奇跡を起こされ私の命は繋がりました。

この二〇一八年九月三日骨髄復活。私にとって三回目の誕生日となりました。

ですが長い間、白血球がない日々でしたからその後も感染症により、肝臓を病んだり、肺がアスペルギルスという真菌で犯されました。日本で一番効果があるという点滴を続けられましたが、まったく良くならず手術しか方法がないようでした。ですがその選択はあまりにもリスクが大きいため、医師たちは踏み切れずにおられ、喀血を繰り返しながらも数ヶ月点滴を続けられて手術可能になる状態を待っておられたようです。

「あなたが水の中を過ぎるときも、わたしは、あなたとともにいる。川を渡るときも、あなたは押し流されず、火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない」
（イザヤ書四三章二節）

入院してから一年後の二〇一九年三月に想定出来うる全ての準備をして下さり手術となりました。手術室を一日おさえられていたのにもかかわらず、主人が呼び出しを受けたのは開始時から一時間ほど経った頃でした。主人の頭をよぎったのはやはり手の施しようがなくすぐ閉じたのかいう思いだったようですが、執刀医の説明で完璧な手術で右肺、三分の一を切除することができ、また奇跡を体験したのです。そして手術からわずか十日後の三月末をもって三八〇日という先の見えない長い入院生活に終止符をうち、退院後二年間続いた抗がん剤の服用も終了しております。

今年になって主人が初めて私に打ち明けたことがあります。

主人が病気の説明を初めて受けたときに、この病気はたとえ今回癒されたとしても寿命（余命）は二年程ですと言われていたそうなんです。

こわれた骨髄からポッとわいて出てきた日から三年がたち、主人の心も平安になり私に言えたのかもしれません。このような幾つもの奇跡により私は今生かされています。試練はどなたにとっても喜ばしい事ではありません。私は自分ではどうにもならない自分自身を手放し、平安の内に主の時を待つことが出来ました。ですがもう一度同じことに耐えられる自信はありません。全て私の力で出来たことではなく世界中で祈ってくださった。今も継続されている祈りによってこのようにお証しさせて頂けるのです。なにより、こんな私のためにムチ打たれた体でドロローサの道を十字架を担いで歩き、私の罪の身代わりとなり十字架に死に墓に葬られ、三日目に死人よりよみがえられ、今も生きて働いてくださっている事によるのです。

「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」（ピリピ人への手紙四章六節～七節）

現在も定期健診を受けつつ歩ませていただいております。人は二週間寝たきりになると七年分の筋肉がなくなりそれを取り戻すのには三倍かかるのだそうです。私の入院生活は三八〇日。寝たきりだったり、無菌室でほとんど動けない日々は何ヶ月におよんだでしょうか。通常の生活を送るのにはほとんど不自由はありませんが、ピアノを弾くことは別で、容易ではありません。ピアニストと名乗るには大変おこがましく、病気以前の自分の記憶や体が覚えている感覚とは程遠く悲しい限りです。主人と共に賛美させて頂く事は主が預けて下さっている賜物であり導きですが、現実とのギャップに弱さを覚える時もあるのです。ですが自分の考えや目に見える状況に縛られてしまうと正しい道を選択することが難しくなっていくのではないでしょうか。どんなに困難な問題でも神のみ心に従う知恵をいただき、お委ねするとき、道が開かれると信じます。今も辛い状況下の中におられる方、深い悲しみに苦しんでおられる方がいらっしゃるかもしれません。悲しみや怒り、不安など心を覆っている塵を押し流し、心を開放してくださる方がおられます。たとえ死の淵を歩むときでさえ、そこには愛と希望があることを知っていただきたいのです。

皆様の祝福を心よりお祈りいたします。To God be the Groly
主の栄光だけが輝くことを願いつつ賛美させていただきます。

マキキ聖城キリスト教会　宣教部
編集　玉寄　朋子
レイアウト　大塩　真由